研究報告

北海道のミニトマト栽培におけるトマト斑点病の発生実態と薬剤の防除効果

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 花・野菜技術センター
白井佳代（しらい かよ）

はじめに

北海道において，トマト斑点病は古くから発生記録があるが（成田ら，1998），特に大きな問題にはなってこなかった。しかし近年では，2003 年に日高地域のハウス栽培ミニトマト（品種‘千果’，‘キャロル 10’）での発生記録以来，各地のミニトマト産地での多発が問題となっている。本病の症状は，葉身，葉柄，茎に褐色の小斑点を生じ，多発すると葉が早期に枯死するほか，萼にも斑点を生じ，商品価値が低下する（図-1a，b）。本病の発生は大玉トマトでは問題となっていないこともあり，これまで道内での発生実態は明らかでなく，防除対策に関する試験例もなかったため，生産現場では対応に苦慮していた。このため，道内のミニトマト栽培における斑点病発生の特徴や，品種による発病差，薬剤の防除効果について試験を行ったので，その結果について紹介する。

植物防疫

I 北海道における斑点病発生の様子と多発要因

道内における本病の発生状況を把握するため，2014～16 年に，道内 10 市町内のミニトマト栽培ハウスにおいて，発病調査および生産者や地域の普及センターへの聞き取り調査を行った。

その結果，本病の多発が問題となっていた品種は，‘キャロル 10’ と‘ラブリー藍’の 2 品種のみであり，‘SC6-008’，‘CF ココ’では発生が認められなかった（表-1）。多発生または甚発生の‘キャロル 10’栽培ハウスに隣接する‘キャロルスター’で，少ない発生を認めた事例があったが（表-1 の生産者 J および Q），栽培上問題とならない程度であった。

多発事例の多かった石狩および留萌地域の普及センターへの聞き取り調査によると，本病の初発生の時期は，道内で主要な作型である半促成長期どり作型（定植 4 月ころ，生育前半のみ無加温で保温）およびハウス夏秋どり作型（定植 5～6 月上旬ころ）において，いずれも 6 月下旬以降であった。

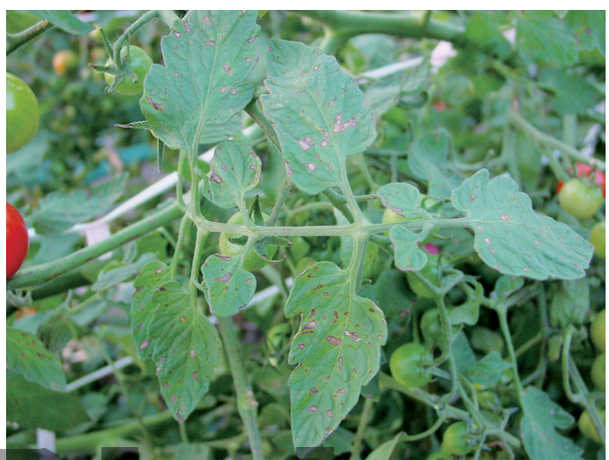

図-1a ミニトマト斑点病の発病葉

図-1b ミニトマト果実の萼に発生した病斑

ハウス内での発病調査において，発生初期の病斑は中位葉付近にごく少数認められるのみであり，他要因により生じる斑点との区別もつきにくいため，ハウス内の簡単な見回りで初発を発見するのは難しいと考えられた。初発後，病斑数は緩やかに増加し，7 月下旬以降に病斑が目立つようになり，特に 8～9 月に急激に発病が進展した。生産者が実際に発生を認識したのは発病進展後の 7 月下旬～8 月ころであった（表-2）。病斑数の増加は，老化葉より新鮮葉で明らかに多く，発病は初発葉位から主に上位葉方向に進展した。老化が進んだ下位葉で新たな病斑が形成されることは少なかったが，下位葉の病斑

Occurrence of Leaf Spot of Cherry Tomato Caused by *Stemphylium lycopersici* and Efficacy of Fungicides on the Disease in Hokkaido. By Kayo Shirai

（キーワード：ミニトマト，斑点病，品種，防除薬剤）